M'S REPORT

三重大学は、市民に開かれた憩いの場として、
地域の「知」の拠点となることを目指しています。
その象徴とも言える三翠ホールにおいて、
2011年初夏、学内と地域に向けて、二つの大きな催しが行われました。

M'S REPORT 1

三重大学特別講演会

「グローバリゼーションと日本」

～若き世代の柔軟な知力、豊かな構想力、そしてエネルギッシュな行動力に期待～

株式会社 東芝　取締役会長
西田 厚聰 Atsutoshi Nishida

[左] 株式会社 東芝
西田 厚聰 取締役会長
[右] 三重大学
内田 淳正 学長

M'S REPORT 1

2011年6月10日、三重大学では株式会社東芝取締役会長・西田厚聰氏を講師にお招きし、三重大学特別講演会を開催しました。「グローバリゼーションと日本」をテーマに、日本経済を牽引する世界企業の会長から、いま若い人たちに求められる力、その力を養う方法など、含蓄に富んだお話をいただきました。

世界で戦うために求められるのは判断力

21世紀に入って、世界は急速な変貌を遂げ、グローバリゼーションはすさまじい勢いで進展しています。たとえば直近3カ月で、私は中国、ドイツ、イギリス、フランス、韓国を訪れ、明日からはインドネシアを訪問する予定です。こうして世界各国を飛び回っているのは私だけではなく、経済界の人々が同様の動きをしています。そうしなければ日本の競争力は維持できなくなりつつあり、もはや日本の経済活動は他国との協調関係なくしては成り立たないのです。企業もグローバル化に対応して、大きく変貌しつつあります。東芝グループの場合、総売上高の約55%が海外での売上で、早く60%越えを達成しようと努力しているところです。そうなると当然、企業活動の大部分を海外で行うことになり、海外で利益をあげながら、日本の活性化のために国内に投資し、雇用も確保していかなければならないという課題に直面しています。

こういう時代に、企業が人材にどういう能力を求められるかというと、私は判断力だと考えています。人間はいろいろな能力を持っていますが、判断力ほど重要な能力はないのではないでしょうか。というのも人間は、朝、起きた瞬間から、どんな小さなことでも判断しなければ生活できません。たとえば、今日は雨が降りそうだから傘を持っていく、というのも一つの判断。そういうレベルから、いろいろな階層で判断を行っているわけです。メーカーでもサービス業でも、企業活動を極めて単純化すると、さまざまなことを判断するプロセス、判断したことをタイミングよく決断するプロセス、決断したことを完全に実行するプロセスにわかれるのだろうと思います。では、この3つでどれが重要なのか。実行力だという方も、決断力だという方もいらっしゃいます。ただ、私は判断力が確かでなければ、どれだけいい決断も実行まではいかないと思っています。

もちろん、企業活動の場合、判断が正しかったかどうかは、10年、20年たってみないとわからないというケースが多いのも事実です。ですから、企業のなかで正しい判断を求めると、判断がなかなかできないというジレンマに陥ってしまいます。しかも、これだけの情報社会にあっても、自分たちが判断

しようとする事柄にとって100%の情報というのは集まらない。市場経済のなかで常に競争して勝つためには、ライバルの情報を集められたらいいのですが、そうはいきません。限られた情報量で、しかも限られた時間のなかで判断することが企業には求められているのです。そこで重要になるのは、正しい判断ができるかどうかというより、置かれた状況のなかで、最適な判断ができるかどうかということでしょう。

教養を学びながら養う広く、深く物事を考える力

では、最適な判断をするために判断力をどうやって磨いていけばいいのか。それはみなさんも大学の教養課程でいろいろなことを学んでいると思いますが、教養を身につけるなかで磨かれていくのではないでしょうか。旧制高校時代には、この教養部分が人間形成、人格形成に大きな役割を果たしていたわけですが、現代の日本ではあまり重視されなくなりました。しかし、グローバル化とは、生まれも言語も文化も違う、当然、価値観や宗教も違う人たちが集まった多様性社会のなかで共生していくということです。だからこそ、世界中の国々、地域の歴史や文化も含めてきちんと知識を得て、教養を高めておくことが必要です。ただ、教養で重要なのは知識ではありません。知識を得ることは大切ですが、教養の意義は広い視野に立って、深く物事を考える力を養うことにあります。広く、深く考える。それは大変難しいことですが、こうした能力を養っていかなければ、的確な判断力には結びつかないと思います。

次に判断するときに重要なのは、考えたことを、本当にこれでいいのかと自分に問いかけてみること。自分を対象化し、自己内対話を繰り返しながら、自分の考えを最適な判断につなげていくことが必要です。しかし、企業活動は広範ですから、これだけでは十分とは言えません。企業が関係するすべてのステークホルダー、お客さまや世界中の協力企業、従業員、株主のみなさま、地域社会の人々などの立場から考えることが大切です。一つの判断を下すにしても、自分とかかわりのあるさまざまな人の立場から物事を考えた上で、必要ならば自分の考えを修正し、それを判断した結果として決断、実行していくことが、いまの企業人には求められているのです。言うは易く行うは難しではありますが、可能な限り、若いうちからいろいろな人の立場に立って、物事を考える習慣をつけていくことが大事だろうと思います。

自ら学び続け、考えることが重要

こうした習慣を入社後も養っていくために、当社では社員に対してリベラルアーツ教育

西田 厚聰
Atsutoshi Nishida

1943年、三重県熊野市生まれ。東京大学大学院法学政治学研究科修了。1975年東芝入社。東芝ヨーロッパ社上級副社長、東芝アメリカ情報システム社社長、パソコン事業部長を経て2005年から取締役代表執行役社長。2009年6月から現職。パソコン事業の創始に携わり、東芝の発展に大きく貢献した。現在、日本経済団体連合会副会長、日本観光振興協会会長。ほかにも各界の要職を多数歴任。

広く、深く考えることは、難しい。
しかし、こうした能力を養っていかなければ、
的確な判断力には結びつかない。

を行っています。もちろん、それで翌日から判断力が飛躍的に高まるものではなく、研修を受けた本人が、次はこれをやってみようと自己啓発を続けていくことが大切です。教育とは、学ぶ側の主体的な努力がなければ、効果は半分以下になるもの。『論語』に、「学びて思わざれば、則ちくらし。思いて学ばざれば、則ちあやうし」という格言がありますが、学んでも自分で考えなかったら、知識だけの世界なのであまり役には立ちません。一方で、自分で考えるだけで学ぼうとしないのは、独断に陥り大変に危険です。21世紀のグローバル化した世界では、まさしくこの言葉があてはまります。したがって、みなさんがどれだけ深く学んだか、それを自分なりにどれだけ考えたかということが重要でしょう。

ただ、外国のことは本よりも現地に行ったほうが、はるかに多くのことが学べると思います。私は尾鷲高校出身ですが、世界史の先生がおっしゃった「尾鷲湾はテムズ河に通じる」という言葉が今でも記憶に残っています。最近、若い人たちは旅行をしないようですが、やはり、自分の世界に閉じこもらず、自分の目で見て、耳で聞き、体験をすることは、ふだんの学習にも役立つと思います。また、世界の人々とコミュニケーションするために、ぜひ外国語を勉強してください。企業では英語はもちろんですが、さらに第2外国語が求められる時代がもうそこまで来ています。外国語を修得すると、日本語の良さもあいまいさもよくわかり、他国との考え方の違いもわかってきます。ゲーテは、「外国語を知らぬ人は、母国語をも知らぬ」という言葉を残していますが、外国語を学ぶことは、それほどに利点があるということです。

「実心」「実言」「実行」を座右の銘として生きる

言葉に関してもう一つ申し上げると、欧米と東洋では、言葉に対する感覚の違いがあります。欧米の場合、聖書に「はじめに言葉ありき」という一節が出てくるように、言葉が心理や真実を伝達し、しかも相手を説得するための唯一のツールであるという定義づけがされてきました。だからこそ、いかに言葉を使って相手を説得するか、自分の主張をするかという側面が発達してきました。一方、東洋では相手を説得することはそれほど重要な意味を持たず、言葉があいまいに使われてきたように思います。典型的な例は、嘘に対する感覚です。言葉が社会システムの基本となっている欧米では、嘘をつくと厳しくとがめられますが、東洋には「嘘も方便」という考え方があり、これまでこうした風土をなくそうという努力もされてきませんでした。いま、企業コンプライアンスが強く言われるようになっていますが、私は全員でこういう風土をなくしていかないと、いつまでたっても改善しないと感じています。それには言葉が重要です。言葉を使っていろいろなことを認識し、言葉を使って自分の考えをまとめ、言葉を使って相手に正しく伝えることが大切ではないでしょうか。私は座右の銘として「実心・実言・実行」を掲げています。「実心」、本当に心で思っていることを、「実言」、正しい言葉で表現し、「実行」、表現したことは責任をもって実行するという意味です。これも訓練ですから、みなさんにも大学時代からずっとやっていただきたいと思います。いろいろ申しあげましたが、グローバリゼーションのなかでは判断力が重要です。それを身につけるためには本を読み、世界を見聞きし、自分で広く深く考えてみること。これを繰り返し、しかも相手の立場から考えてみることで、最適な判断ができる力は伸びていきます。そういったことを若いみなさんにはぜひ心に留めていただいて、大学生活や人生に役立てていただければうれしく思います。

内田淳正学長のあいさつに始まった講演会。会長の実体験に裏づけされたお話は、会場に集まった学生たちを奮起させるものでした。講演後は、会長の夢や日本企業のグローバリゼーションなどについて次々に質問が寄せられ、盛況のうちに終了しました。

三重大学特別講演会
「グローバリゼーションと日本」
～若き世代の柔軟な知力、豊かな構想力、そしてエネルギッシュな行動力に期待～
株式会社 東芝　取締役会長　西田 厚聰

日時：2011年6月10日
会場：三重大学講堂（三翠ホール・大ホール）
司会：武田保雄理事・副学長（統括・研究担当）

三重大学生活協同組合創立40周年記念
C.W.ニコル講演会

人と自然との共生を語る

作家、環境保護活動家、探検家
C.W.ニコル　C.W. Nicol